

いわて鳥獣保護センター通信 第15号

(発行日:令和3年3月8日)



令和2年、本来なら東京オリンピックが開催されて日本中が歓喜と熱気に包まれた明るい平和な年になると、多くの人々が信じ、期待をしていたのにまさか、中国で発生した新聞の片隅に小さく「新型肺炎発生か?」のニュースがその後、世界中の人々の生活様式を大きく変えてしまうようなきっかけになると予想されます。

岩手県鳥獣保護センターは昭和46年に幼傷病野生鳥獣の救護を目的に開設されて今年で49年を迎えます。今年は、保護、搬入される幼少病鳥獣には、昨年に比べて幼獣、幼鳥の数が少し増えたくらいで、新型コロナウイルス感染症の影響は少なかつたようです。しかし、11月頃には、一時的に、診察、治療に使用する消毒用アルコール、手術手袋、消毒用ガーゼ等が納入されにくい状況となりました。

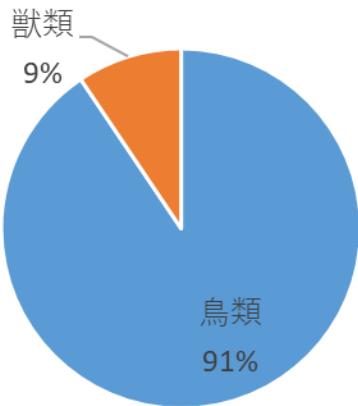
新型コロナウイルスは、コウモリが持っているウイルスに遺伝子的に近いため変異したものではないかという説があります。センターに搬入される負傷した鳥獣の中にはコウモリもありますし、10月後半から春にかけては鳥インフルエンザを保有しているリスクがあるオオハクチョウも搬入されます。(搬入された全てのオオハクチョウについては鳥インフルエンザウイルスの検査を実施しています)それ以外にも、多くの野生鳥獣は、人獣共通感染症を持っている可能性があり、鳥獣の保護飼養に従事する我々は、常にウイルス、細菌、ダニ、寄生虫の侵入と自らの防疫を念頭に入れて対処する必要があります。

新型コロナウイルスの受け入れをしている医療機関では、医療設備、医師看護師の不足で医療崩壊が危惧されていますが、人と野生動物という違いはあっても、感染症の防疫対策の基本は同じです。施設に動物を入れる際は検査を実施する、動物同士の接触を避ける、マスク・手袋等の防護具使用の徹底する、施設設備・使用器具の消毒と滅菌等。人であつても動物であつても「基本的な感染症対策の徹底」が大切です。

岩手県でも多くの方が新型コロナウイルス感染症で亡くなり、飲食店や病院でクラスターの発生が報告がされています。ワクチン接種開始の報道がされていますが、これからも感染しないよう、させないように気を付けて生活しましょう。



今も世界中が新型コロナウィルスの驚異にさらされている中、岩手県の野生動物においては年度当初こそ緊急事態宣言に伴い外出が控えられた事で野生動物との接触が減ったためか幼傷病鳥獣の搬入数は数えるほどでしたが、令和3年2月末現在は例年通りの搬入数となっています。（下図表参照）



	鳥類種	数
1	キジ	14
2	フクロウ	12
3	オオハクチョウ	9

	獣類種	数
1	カモシカ	5
2	ヒナコウモリ	3
3	ニホンリス	1
3	ムササビ	1

鳥類の中で搬入数が一番多いのはキジでした。保護に至る主な原因は親が交通事故に遭ったり、作業中の不慮の事故でヒナだけが取り残されてしまったというものでした。キジは一回に6から12個の卵を産むためどうしても保護数が多くなります。

獣類についてはカモシカが一番多く、交通事故に遭って搬入されるケースが多かったです。また、昨年度末には5匹のニホンリスのニホンザルが保護されました。原因は巣があるのに気づかず木を伐採し驚いた親が逃げ出し戻ってこなかつたというものです。ニホンリスも一回の出産で3から4頭産むとされているため保護数が多くなります。

保護した鳥類の数は18種類にも及びます。種類が多いということはそれぞれ生活パターンが違う、食べるものも違う、巣立ちまでの日数も巣立ちへ向けての訓練方法違ってくるため、子育てに慣れていないスタッフはあれを調べこれを準備してと、そういうしているとお腹が空いたとヒナたちの大合唱！てんやわんやの大騒ぎ、気づけば一日が終わるという日々が続きます。もちろん交代しながら夜、家へ連れて帰りお世話をします。

なにより幼鳥獣の保育で難しいのが給餌です。キジやカモなどのヒナは卵からかえった直後から自分で食べるのほぼ問題ありません。他のヒナが開眼前に保護された場合、開眼して一番に人間を親だと思うので比較的スムーズに給餌を行えますが、これが開眼後だとなかなか口を開けてくれません。自分から食べるようになるまでに数日かかる場合もありますが、食べないとすぐ弱って死んでしまいます。放野率が低いのはこのためです。強制給餌という方法もありますが、ヒナは口が小さく慣れてない人間が行うと誤嚥させ最悪死なせてしまう危険が伴います。

食べる問題を乗り越え、鳥たちが大人の羽が生え始める頃になると耳をふさぎたくなるほどの大音量で鳴き、リスは手で捕まえるのが難しいほどやんちゃに暴れまわり、餌を入れるとすぐ食べてなくなつと大騒ぎ、スタッフはこれまた違う大変さを味わうこととなります。ですが、逆に考えるとほぼ安心できるまで育ってきたとひと安心でもあります。

そして、体も大きくなり羽や毛が生え揃い、本能で人間を嫌がりだすのをみると巣立ちが近いんだと、頑張って良かったと思うと同時に寂しさも感じます。

でも、こういった苦労を味わったからこそ、動物たちを自然へ戻すときの感動や喜びはひとしおです。

最後に、代わりの親にも関わらず無事自然へ戻れた動物たちへ感謝したいと思います。

動物たちが今後も幸せな日々をおくれますように。





動物の不思議…動物も利き手があるの？

人間の9割は右利きと言われていますが、動物には利き手があるのでしょうか？

インターネットを使って論文を調べた結果、下の表のようになっており、どうやら動物にも利き手がありそうです。

表1.動物の利き手の報告の一例

動物の種類	内 容	情報発信元
イヌ	雄は右利き、雌は左利きが多い	hidarikiki.info
ネコ	雄は左利き、雌は右利きが多い	アイルランド、クイーズ大学
ニホンザル	左利き41%、右利き20%、両利き37%	京都大学霊長類研究所
チンパンジー	右利き優位	京都大学霊長類研究所
ゴリラ	右利き優位	京都大学霊長類研究所
オランウータン	左利き優位	京都大学霊長類研究所
シロナガスクジラ	ほとんど右利き	米オレゴン州立大学
ホッキョクグマ	全頭が左利き	mamabu
カンガルー	左前脚を使う傾向がある	ナショナルジオグラフィック
オウム	左足で物をつかむ傾向がある	Reuters
ペリソーダスマクロレピス(魚)	個体により利き手がある	富山大学大学院医学薬学研究部

では、動物の利き手はどのように調べたのでしょうか？ 概要は次のようなものでした。

イヌは、お手：55%右手、44%左手、残りは両手。目隠しを取る：51%右手、34%左手、残りは両手。餌を取る：42%が右手、40%が左手、残りは両手という傾向にあったとの報告。

ネコは、トイレにどちらから踏み出すか、階段を降りる際はどちらから踏み出すか、寝転がるとき体のどちら側を下にするか、狭い穴に手を差し入れて餌を取り出す際の行動を調査。

クジラは、63頭のシロナガスクジラにセンサーを取り付け調査。水深60メートルより深いところでオキアミが密集している場合、わずかに右に回転しながら獲物の群れに突入することが多かったとの報告。

ニホンザルは、1962年と1965年に河合氏は、幸島のサルで投げ与えたサツマイモをキャッチする調査。左または両手が37.5%、右または両手が16.7%と報告。1964年に幸島のサルでピーナツを拾う手を調べた徳田氏の報告では、左利き41%、右利き20%。1988年に霊長類研究所の放餌場のサルで固形飼料に手を伸ばす動作を調べた久保田氏の報告では左利き43%、右利き11%であった。これらの報告で共通するのは、左利きが若干多く、利き手は個体毎には安定しているとのこと。

フクロテナガザルは、9施設42個体（フクロテナガザル22頭、その他20頭）がチューブから食物を取り出す手を調べ、有意に左利きに偏っており、2011年の森野氏の調査と一致したとの報告。

ゴリラは、アフリカショウガの根を地面から引き抜いた後、片方の手で茎を握って、反対の手の微細な操作により髓を取り出して食べるが、その際、どちらの手で行なうか調査。21頭の4,293事例から、すべての個体で使用する手に極めて強い偏りが見られ、21個体のうち15個体が右利きを示し、統計的にも有意に右利きの方が多かったとの報告。

オランウータンは、筒の内側にピーナッツバターを塗った筒を渡し、指で舐めるしぐさを調査。

チンパンジーは、紐を引っ張って物を取るなど4種類の片手動作を30頭で調査。25頭のチンパンジーが80%の確率で、どちらかの手を一貫して使う利き手が存在するとの報告。

カンガルーは、何百匹という野生の有袋類のなかでアカカンガルーとオオカンガルーは、ほぼ何をする場合でも左の前脚を使うとの報告。

手に関する調査以外には、オウムは、16種のオウム約320羽について、どちらの目で獲物を探すかを調査。約47%が左利きで33%が右利き、残りは両利きだったとの報告。

アフリカのタンガニイカ湖に生息する魚、ペリソーダスマクロレピスは、口の形が個体により左右で異なり、獲物を襲った際の成功の確率が違うとの報告。

タイヘイヨウアマガエルは、敵に脅かされると右側に跳ぶ傾向にあるとの報告。

カタツムリは、多くの種は右巻きで、わずかに左巻きの種がいるとの報告。

ホッキョクグマは、カナダの先住民族・イヌイットの観察で、緊急事態の際に左前足より右前足の動きの方がわずかに遅いという報告。

この他には、犬・猫では性別により左右差があり、男性ホルモンが利き手と関連するという説、霊長類では、樹上生活の依存度が高いと左利きで、二足歩行を始めると徐々に右利きになるという姿勢理論というものがあるらしいです。

このように動物にも利き手がありそうです。皆様も動物を観察して様々な不思議を見つけてみては？！



センター白鳥模様

昨年に引き続き、野生復帰ができなくなり現在当センターで終生飼養中のマガソ1羽と白鳥5羽のお話をしたいと思います。

冬の間、鳥インフルエンザの感染事例が多いマガソと白鳥は、感染防止対策の一環で感染野鳥との接触を防ぐ目的により、白鳥専用隔離エリアで過ごします。冬の間過ごす隔離エリアは狭い部屋と狭い運動場で水回りは畳一枚ほどの大きさの仮設プールという鳥たちには申し訳ないほどの窮屈な場所です。その場所で鳥たちは身を寄せ合いながら春を待ちます。

暖かい春に近づき冬鳥たちの北帰行が終盤を迎える、鳥インフルエンザの感染リスクが下がり始めた頃、隔離エリアで過ごしたマガソと白鳥を自然豊かで広い池のあるエリアに戻すことにしました。

このエリアは屋根もなく野生の動物たちも出入りするほど自然に近い自由なエリアで当センターでは放鳥池と呼んでいます。ここに放す鳥たちは主に白鳥などの水鳥で、保護飼養中であっても放鳥という扱いになります。飼養中で野生復帰が困難だと判断された鳥の中には、獣医師の予想を越え自然復帰が可能なレベルにまで回復する個体もいます。そこで鳥たちの意思とタイミングでここから大自然へ自由に旅立っていくように放鳥扱いとしています。

さて、放鳥池に戻り久しぶりの広く自由な自然を満喫しているマガソと白鳥たち、何事もなく日々が過ぎていきすっかり根雪も溶け切ったある日のことでした。池へ給餌に行くと1羽の姿がなく確認すると、隔離エリアでも元気だった白鳥が放鳥池を飛びたし自然へ帰ったようでした。

そしてその白鳥を入れ替わるように、北帰行の途中で怪我をしてしまい搬入され治療中だった白鳥の幼鳥1羽の状態が良くなつたため、放鳥池の鳥たちのへ合流させました。群れに馴染めるか心配になりますが、問題ありません。実はマガソが白鳥たちのリーダーで、新参者が群れに入ったとき他の白鳥たちは威嚇したり攻撃しようとすると身を挺して間に入り仲裁し、群れの平和を執り成します。我々も頭が上がらないほど信頼する頼れるリーダーです。多少のトラブルはありましたが、リーダーの活躍もあり程なくしてこの幼鳥も集団に溶け込んで平和な日々が過ぎて行きました。

梅雨に入り白鳥たちは換羽を迎えるが抜け始め、池の回りに沢山の羽が目立つようになった頃、白鳥の世界に変化が現れました。体の大きい白鳥が少し小柄の白鳥を群れから追い出そうとしています。追いかける白鳥、逃げ惑う白鳥、威嚇する声と悲鳴とを何度も聞きましたが、我々は自然の中で生きる動物たちのルールということで関与しませんでした。

程なくしてこの1羽はどうどう群れから離れ見つからないようにと隠れてしまいました。すると群れのリーダーのマガソは群れに戻れない白鳥を捜してけたたましく鳴くのです。見つけるまで鳴いています。草木も生い茂り始め我々でも見つけるのが困難なほどで、マガソの声を頼りに探したのは言うまでもありません。

群れの餌場に近づけないこの白鳥のために餌箱を作り、隠れ場所の傍に置きました。すると無事この餌箱から餌を食べ始めしばらくすると、放鳥池の中で住み分けができてきました。いじめっ子の白鳥は別の白鳥とペアになり何時も行動を共にし、いじめられっ子の白鳥はマガソとペアのよう行動することで落ち着いたようでした。

季節が秋に近づくにつれ、不思議といじめられっ子の白鳥はだんだん群れに近づいて行き、気づけば何事もなかったかのように群れに交じっていました。前のように威嚇するものもいません。

放鳥池の枯れ葉の絨毯にも雪の知らせが届くようになり、1羽のマガソと5羽の白鳥はまた隔離エリアへと収容されましたが、今も仲良く行動を共にしています。

あの夏の事件は何だったのか、いまでも狐につままれた思いです。

